

うめくさ-10

欧米に紹介された中国のイヌビエの図

「雑草学（半澤 洵 1910 六盟館）」の扉の題字である「雑草」の2文字が、ロンドンとニューヨークで刊行された「WEEDS OF THE WORLD Biology and Control (Lawrence J. King 1966 Leonard Hill, London, Interscience Publishers Inc., New York) : (図-1)」に収録されたことは、「雑草防除大要（植木邦和・松中昭一 1972 養賢堂）」に紹介されてよく知られている。「WEEDS OF THE WORLD」では、「weed」という言葉のヨーロッパ世界での歴史的経過を述べた部分で、中国と日本での表意文字として「雑草」が解説されている。「草」の文字を(a: 艸), (b: 日), (c: 十)に分解して、それぞれの意味を、a: 2本の幼植物を縮小して絵画化, b: 太陽が昇る様, c: 大地, b+c=早い, a+b+c=草, すなわち作物より早く育つもの、と説いている。「WEEDS OF THE WORLD」にはもう1枚、漢字の入った図が357頁にある。除草剤の利用に関する章で、「稲作での最も古くからの雑草制御手段が湛水であるが、それでも湛水に耐性を示す、マコモ、カヤツリグサ、イ、ヨシ、ヒエなどが

ある。」と述べ、イヌビエの図と「稗」の漢字を示している。図の説明には「Illustration of *Echinochloa crusgalli* copied from the Chinese herbal, Pen Ts'ao Kang Mu, of Shih Chen Li, published about 1590. The ideograph reads 'Pai', i.e. 'a weed (a bad or low-grade grass) in a grain field'. This is one of the most universally distributed weeds, and is particularly noxious wherever rice is grown. It is used as a famine food by the Chinese. While it is undoubtedly represented by a plethora of ecotypes and varietal taxa throughout the world, it is still recognizable from this figure.」とある。すなわち、「1590年頃刊行された、中国の本草書、李時珍の本草綱目から採ったイヌビエの図」である。

李時珍の「本草綱目」は中国の薬物学、いわゆる漢方の集大成で、江戸時代の慶長12 (1607) 年に導入されて以来 (1604年以前との説もある)、日本の医学、薬学、博物学などに非常に大きな影響を与えた。明治期はもちろん、現在でもはかり知れない価値をもっている。李時珍の生涯と著書「本草綱目」について、白井光太郎博士の解説がある。

「李時珍字は東璧、蕪州の人。読書して経生の業を治めず、獨り醫書を好み纂修に刻意し、本草綱目五十二巻を撰す。嘉靖三十一年に着手し萬曆六年に完成す。稿を改む事三回、分ちて五十二巻とし列して十六部となし、部各類を分ち數凡六十名を標して綱となし、事を列ねて目となし品物一千八百九十二種を記載し、一々釋名、集解、氣味、種治、修治、發明、正誤附方の七項に分説して歷代の名醫碩學の諸説を參輯評論して自己の見識を以て之を判定せるものなり。實に本草學上空前絶後の大著と稱せらる。時珍初め官は楚王府祠正後敕封文林郎四川蓬溪縣の知縣に任ず。本草綱目の初版は萬曆十八年金陵に於て刊行せらる。萬曆二十四年子李建元父の遺表を添へて其書を以て神宗に献ず。萬曆三十一年江西省の巡撫夏良心、此書の頒布弘からざるを患ひ、公費を

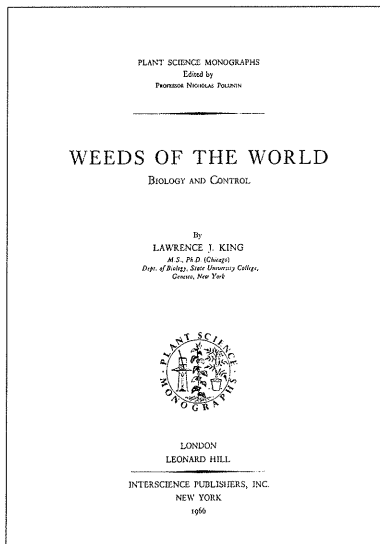


図-1 「WEEDS OF THE WORLD Biology and Control」の扉

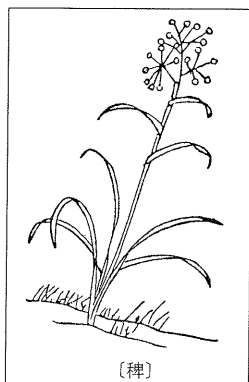


図-2 李時珍「本草綱目」の稗の図、(「新註校定 國譯本草綱目 第七冊 穀部・菜部 春陽堂(1932)」の「穀部第23卷」より、株式会社春陽堂書店の許諾を得て転載。)

し、日本で活字本として現在よく見られるのは「新註校定 國譯本草綱目 春陽堂」で、その「穀部第23卷(1932)」所収の「稗」の図(図-2)は「WEEDS OF THE WORLD」のものとは相当に異なる。「國譯本草綱目」のヒエの図は、同書の他の図と違和感はないが、後者はずっと写実的すぎる。「本草綱目」のヒエの図がこれ1種だけだった、ということではないかも知れないが、「WEEDS OF THE WORLD」の図は「本草綱目」由来とは思えない。なお、「本草綱目 草部 第21卷」の末尾には「雑草 有名未用」という項目があるが、これは「他の項目に分類できない草、あるいは正体の不明な草」であって、耕地雑草を意味するものではない。

「WEEDS OF THE WORLD」のヒエの図に近いものは、ずっと時代の下った清代の植物図鑑「植物名實圖考 (Zhi Wu Mi Shi Tu Kao) 吳其濬 (Wu Qi-Yong) 1848」所収の「稗子」である。葉や穂の配置が少し異なる部分があるが、基本的に同じ図である(図-3)。この本とその著者についても白井光太郎博士の解説がある。

「吳其濬は淪齋、雋婁農と號す。河南省固始縣の人。嘉慶二十二年進士に及第し翰林院編輯官に任じ、同二十四年廣東省主席試験官となり、道光十一年帝室文書局に入り、同十二年湖北教育部長に任じ、同十四年北京に召還せられ、禮部長、秘書局次長、儀

以て第二版を刊行し、時珍の遺表を附刻す。江西本草綱目と稱する者はなり。我邦にて最初に翻刻せる寛永十四年版本草綱目は此書を元本とせり。(支那及日本本草學の沿革及本草家の傳記 1930 岩波書店)」

「本草綱目」には、それぞれの品物に図がつけられているが、それには種々の改訂もあったようで、どれが元の姿なのか詳細を知らない。しか

禮部次長等に歴任し、同十七年甘肅省教育部長、同十八年浙江省試験官を経て、再び北京に還り、軍部首席次官となり、翌年大蔵次官となり、同二十年湖廣省総督となり、同年湖南総督となり、二十二年同省の匪賊を平定し、次で病に罹り、同二十三年浙江総督に還り、同年雲南総督に轉ず。同二十五年福建総督となり、暫くして陝西省総督に還り、同二十六年病に由つて退官し、幾くもなく歿す。植物名實圖考二十二冊あり。著者は各省に歴官し親驗目睹の植物に就て此書を作り、其圖も亦頗る眞に逼るの妙ありて、従来行はれたる本草圖の比に非ず。故に學術上の価値最も多大にして参考に益あるものなり。(白井：前掲書)」



図-3 吳其濬「植物名實圖考」の稗子の図、(楊家駱主編 中国學術名著第二輯 中国科學名著第一集 第一冊、植物名實圖考 上、世界書局(中華民國63)より、世界書局Co.Ltd. Taiwanの許諾を得て転載。)

「WEEDS OF THE WORLD」の著者、Dr. L. J. King にヒエの図を提供したのは、マサチューセッツ、ケンブリッジのShiu-Ying Hu氏となっている。中国や台湾で流通していた「本草綱目」の中に「植物名實圖考」の図を用いた版があったのかも知れないが、そうでなければ何かの手違いで「植物名實圖考」と「本草綱目」を混同したのであろう。現在では、アジアの雑草の情報は当時に比べてもっと正確に欧米に発信されているものと思う。(「國譯本草綱目」からの転載を許諾された株式会社春陽堂書店、および「植物名實圖考」からの転載を許諾された世界書局Co. Ltd. にお礼申し上げます。)

(も)